

human

No252

2013/4

医療を通じて人と人とのふれあいを広めるために
ヒューマン(人)と名付けました。



「健康を守る教室」にてセラバンドを使用した体操

救急指定・労災指定病院	さくら総合病院	愛知県丹羽郡大口町新宮1-129 (0587)95-6711(代)
老人保健施設	さくら荘	愛知県丹羽郡大口町新宮1-96 (0587)95-6722
訪問看護ステーション	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8623
ヘルパーステーション	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8026
居宅介護支援事業所	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8027
デイケアセンター	御 嶽	愛知県丹羽郡大口町新宮1-129(さくら総合病院2F) (080)5294-5728
有料老人ホーム	太郎と花子	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10 (0587)95-0111



<http://www.ijinkai.or.jp>

E-mail:info@ijinkai.or.jp

怒鳴る院長

院長 小林 勝正

開業以来、職員に「院長に叱られた」「院長に怒鳴られた」という言葉をよく耳にしてきた。しかし、こうした私への批判は、ここ大口において開業してから始まった話ではない。「医療とはこうあるべき」とか「患者さんの苦痛を少しでも早くとり除くために」という願いで医師を目指した。そして、昭和44年に医師国家試験に合格してから、私はいつも怒鳴っている。言ってみれば、40年間怒鳴り通しである。こうした怒鳴る私が悪いのか、怒鳴られる相手の人が悪いのかと考えれば、一方的に怒鳴られる相手が悪いに決まっている。人

として許されない言動、行動は患者さんや家族を傷つける。ちよつとした仕草が誤解をよび、人の怒りをかう。本来、こうした人間の本質に関わるデリケートな問題は、小さい頃に家庭教育でつちかわれるべきである。いくら学問を積み重ねても、基本ができていないなら人間性を疑われ根底から信頼をくつがえされる。「上から目線」という言葉がある。人を見下すという批判さるべき態度の意味だ。しかし、私は元来身長があり、いつも人を見る時は見下すこととなる。「人の目線で」と言われても、中腰で話せば高校時

代のラグビーで痛めた腰が痛む。ある冬の日、名古屋の町を皮コートを着、頭に毛皮の帽子をかぶって歩いていった。すれちがった男性二人が「おい！ロシア人だ。ロシア人だ。」と小声で話しているのを聞いた。身長170センチの男性でも私を見る時は10センチ見上げなければならぬ。私からすれば「上から目線」となる。大きな人間が普通にしゃべっても、見上げながら聞く人にとっては、迫力のある言葉となるのであろう。

名古屋第一赤十字病院では、何人もの看護婦さんを泣かした。男女の関係で色っぽく泣かせたわけではない。患者さんのチエック、取り扱い、介助の不備を指摘したのである。しかし、この時、くやし涙を流した看護婦さんは、その後、「なにくそ！」と

いう気持ちで患者さんのために頑張り、立派な看護師として育って行った。人を泣かすだけではなく、国立がんセンターでは、私自身が何度となく自分の不甲斐なさにくやし涙を流したものだ。そんな過去があるからこそ、今の地に於いて医療ができる訳だ。

院内を歩いていて、廊下に水が溢れている。患者さんが間違つて滑つて転び、骨折でもしたら大変なことになる。当然、私は近くにいる職員に「ここが濡れているから、危ないから拭いて。」と言う。そうすると、その後は、職員が「院長から叱られた。」という話になる。私は叱っているわけでもない。ただ、患者さんに危害が及ぶことを心配し、指示を出しているだけである。この指示を誰かが出

さなければ、結果的にアクシデントに見舞われる被害者が出るのである。事故の現場でも同じである。「怒鳴るな。職員が萎縮する。」という意見もあるが、一分一秒争う時に「お願いしまーす。」などと悠長なことなど言っていられるものか。

救急車に患者さんに乗せ、重症患者を他院に搬送する時など、救急車のマイクを持って怒鳴りっぱなしである。重症患者さんを思えば、赤灯をつけサイレンを鳴らす救急車に道を譲らない車など怒鳴られても仕方ないではないか。余裕があれば、「ご協力感謝します。」などと言ふこともある。しかし、意識朦朧もろろとなつている状態の悪い患者さんに乗せていけば「助かってくれ。」という気持ちも「どきなさい。」「道をあけなさい。」などと怒鳴るような言葉

になることは当たり前前の行為ではないだろうか。同じように搬送されて来た患者さんの診断、処置を行なう時の心情は、通常の心情の何倍もの緊張を強いられる。これは医療を行なう者として、当然のことであり、お互いに声を掛け合つてミスのないように、そして、円滑に医療を行おうとするのは、当たり前と考えている。

助かつた患者さんの中には、「院長の怒鳴る声だけが聞こえていた。でも心強かつた。そして自分は助かるんだ。」と思つたという。我々、医療人は、こうした患者さんのために日夜努力し、自分自身を緊張させているのである。でなければ、夜中に起きれますか。日曜日に緊急で走れますか。事故現場でガソリン引火の危険性のある中で、患者さんに手を差し伸べれますか。今の若い

人たちは、まず、救助側が怪我をしてはならない、二次事故に巻き込まれてはならない、としている。そんなことは当たり前だが、その恐怖を乗り越えてこそ、初めて助かる命もある、ということも真実である。

皆、傍観者であるからこそ、そして「誰かがやってくれるであろう、自分ではなくとも」という気持ちがあるからこそ、18年前の神戸の震災の際にも、我々の医療チームは全国で初めての救援チームとなり得た訳だ。2年前の東日本大震災においても死者を一人でも一日でも早く、遺族に返そうという気持ちがあつたからこそ、飯舘村を通つても、原発周囲まで行つたではないか。人を怒鳴る以上に自分にかかると思えばこそ、胸を張つてできる行動である。

たぶん、私は死ぬまで怒鳴りまくるであろうが、私に怒鳴りまくられる人は、なぜ叱られたか、なぜ怒鳴られたかの真意を理解すれば表面に表れた行動ではなく、その心が理解でき、今後の人生の糧となるのではないだろうか。

当院の事務職員で私に相当怒られた職員がいた。当院を辞して数年後、医療関係の会ではつたり出会つた。「おお、元氣？今どこにいるの？」という問いには、「ある町立病院の事務長をやっています。あの時、院長に怒鳴られていなければ、今の自分になかつたと思います。私を作つてくれたのは、院長でした」と挨拶された時、「私の怒鳴りもまんざらではないわ」と思つた次第である。

ごあいさつ

ハートセンター長・循環器内科部長 久原 康史

この度、2月より循環器内科(ハートセンター)の設立にあたり、愛知医科大学より赴任いたしました久原康史と申します。

私は球磨川や八代亜紀で有名な熊本県八代市の出身で、大学入学とともにここ愛知県に19年前に移り住み現在に至ります。いつの間にか赤味噌が大好きな名古屋人になってしまいましたが、今でも熊本をこよなく愛し、馬刺しや焼酎が大好きで私の子供達も“くまもん”にはまっています。

医師になってすぐに循環器内科医を目指し大学病院と岐阜県の土岐市立総合病院で初期研修を行いました。土岐にいた当時は今より急性心筋梗塞の患者数が多く、昼夜を問わず緊急呼び出しが頻繁にありカテーテル治療に追われました。今の時代では考えられませんが、研修医2年目にして夜間は一人で体外式ペースメーカーやIABPを入れながら緊急カテを行い上級医師の到着を待つといったこともあり、その当時ですでに自分の手で病気を治すという喜びや医師としての度胸、また逆に医療の恐ろしさのようなものを学んだ気がします。また、大学病院ではレベルの高い治療技術の習得や臨床研究、医学生や救急救命士の教育にも携わりました。同時にいろんな地域の医療機関に出向き循環器医療のサポートを行って参りました。さくら総合病院にも昨年4月より週に一度赴き、心臓カテーテル検査や治療を行って参りましたが、今までここ大口町には心臓カテーテル治療を用いて虚血性心疾患の専門的な治療を行うことが可能な病院はありませんでした。

この度、私と丹羽亨先生が新たに赴任し、加藤千雄先生とともにハートセンターという名の下、この病院でも24時間365日急性心筋梗塞を始めとした救急疾患の治療が可能となりました。勿論、狭心症や心不全、不整脈などの疾患にもしっかりと対応し質の高い医療を行って参りたいと思います。しかしながら当然、看護師さんをはじめ放射線技師さんや検査技師さんの協力なくして治療は成り立ちません。まだまだ始まったばかりで不慣れなことも多く皆さんにご迷惑をお掛けしており、そして何より朝の小牧の渋滞に心が折れそうになっていますが、情熱をもってさくら総合病院そしてこの地域の為に微力ながら尽力していく所存です。夜間待機の日は大好きな焼酎も控えて体調万全で待機していますので、どうか皆様方の御助成を頂ければと思います。宜しくお願いいたします。

第24回 「健康を守る教室」

テ マ:「もし家族が認知症になったら…」 & セラバンドを使用した体操

日 時:平成25年4月27日 土曜日 13:00~14:00(受付12:30~)

場 所:新館1F ロビー

講 師:精神保健福祉士 疋田 理学療法士 磯村

参 加 料:無料

お問い合わせ:受付窓口もしくは医療連携室 Tel 0587-95-0015



家族の誰かが認知症になったら、日常生活は一変します。いつもと違う行動にどう対応したらいいのか分からず、家族みんなが振り回されてしまうかもしれません。やりきれない気持ちにもなるでしょう。

介護者がうつ病を発症してしまうことも少なくありません。ところが認知症って辛い中でも喜びを発見出来ることがあるのです。ではどうしたらそんな気持ちになれるのでしょうか。

認知症の家族を抱えて戸惑う方々と一緒に考えながらふっと気持ちが楽になるきっかけを探ってみましょう。

※健康を守る教室の体操コーナーでおなじみのセラバンドを健康教室終了後に下記価格で販売をいたします。

ご希望の方はお申し出下さい。 黄色(弱)400円 緑色(中)460円 青色(強)520円



笑顔のテーブル

有料老人ホーム太郎と花子 事務長代行 安田 力 つとむ

「ちょっといいですか」

公休のはずのケアスタッフが声をかけてきた。彼は最近ホームに入居されたC様のことを話し始めた。車椅子のC様にとって、ご家族が用意したテーブルは低すぎ、食事をこぼしてしまうらしい。

「わかった。じゃあ、ケアマネさんに頼んでレンタルの」と言いかけたとき、彼は私が予想もしないことを言い始めた。

「それで僕、テーブルを作ってきたんですが、使ってもらってもいいですか？」木材や金具を自費で買った、頑丈で丁度良い高さのテーブルだった。Cさんは大喜びし、何度も感謝の言葉を述べた。満面の笑みとはこのことかと思わせる笑顔だった。

そのケアスタッフは何もしていない私に対し、

「許可してくださって、ありがとうございます。」

と深く頭を下げて、帰って行った。最前線で働く介護職員がいかに尊いか、いつも感じさせられる。私には決してマネできないやさしさを彼は持ち合わせている。

ご家族が要介護状態になって食卓から笑顔が消えてしまった家庭をいくつも見てきた。あのやさしさがご入居者の皆さまやご家族の笑顔を引き出す。

復興支援キャンペーン 気仙椿ドクターズハンドクリーム

三陸沿岸の気仙地域周辺では、寒暖差のある土地柄の特性で、ここで育つ椿からは良質の油が採れていました。震災後、地域の人々で集めた「気仙椿の種」から、気仙地域の自然と産業を礎とした事業を創出し、未来の子供たちに繋げるために、「気仙椿ドリームプロジェクト」が発足しました。今回この気仙椿の油から純国産自然派化粧品として開発されたのが、「気仙椿ハンドクリーム」です。気仙地域特産の椿を地元の人々が丁寧に精油した最高級椿油を使用しています。本製品をご使用いただくことがそのまま気仙地域の産業復興につながります。



【写真】

ハンドクリームをご愛用頂いている伊藤高信様、弘子様ご夫妻。水を触っても効果が薄れないと、毎日ご使用頂いています。お二人とも手に張りがあり、艶々としてみえました。

【価格】

1890円（内容量80g）

【販売場所】

本館受付・売店・新館受付・リハビリ受付・御嶽・太郎と花子売店・さくら荘

お気軽に職員までお問い合わせください。皆様のご協力を宜しくお願い致します。

